



## 巻頭言

# 学生会員・若手研究者への メッセージ



**黒田一幸** Kazuyuki KURODA

早稲田大学理工学術院 教授

3月の学会・年会シーズンである。学生会員の中には今年の日本化学会春季年会で学会デビューという人も少なからずいるであろう。あるいは発表のために学生会員になったばかりの人もたくさんいるはずだ。1975年明治大学で開催された春季年会で私もその一人だった。今振り返っても冷や汗ものの発表で、初めての学会発表の経験、特に次講演者席に着席してから質疑応答を終了して降壇するまでの時間は今でも鮮明に記憶している。的を射た座長の質問もよく覚えている。終わったときの解放感も忘れることができない。その後毎年のように出席し発表を続けていると、それなりに慣れてきて、少しは落ち着いて講演できるようになった。そうなってくると学会参加が楽しみになってくる。当時本誌の3月号にはプログラムが全部掲載されており、プログラムを全ページチェックして学会に臨んだものだ。昔も多くの企画が並行して進行するので、選択に困ることも多々あったが、今はATP企画などさらに充実し、どの会場に行くか、大いに迷う人もいるに違いない。新しく参加される若い諸君も時間の許す限りぜひ年会を楽しんでいただきたい。

口頭発表を申し込むにあたって、講演申し込み分類の中から最も適切な中分類、小分類を選択し申し込むのは当然である。しかし中分類をよく見ると、「その他」あるいは「新領域・その他」が必ず入っていることに気づくはずだ。もちろんこれは、ほかの分類に当てはまらない発表の受け皿である。どの中分類、小分類にも該当しない発表が当然ながらあり、それは学問の多様性や広がりを示す重要な1つの指標である。プログラム編成委員はそれらの発表の配置にも頭を絞っておられることと思う。学術・分野の新しい芽が出て、それが大きく発展し、飽和状態が続き、その後徐々に衰退していくことはよくあることだ。このような学術の発展段階を考えると、現在多くの発表が集まる分野も最初は「その他」だったかもしれない。大きな研究者集団が形成されてから、その分野に飛び込む場合だけでなく、研究者仲間がほとんどいない寂しい状況で研究を進める場合もあるだろう。それらは良し悪しではなく、自分の研究を位置付ける上で意識することが必要だ。内容に関心をもつ人の数が少なければ、発表後の質疑応答も盛り上がりがないかもしれない。しかし、そのことと研究の価値とが直結しているわけではない。意気消沈せず着実に歩みを進めることが肝要だ。少数派の研究で注意しなくてはいけないのは、独りよがりの研究になってはいないかと、厳しく自己に問いかける必要があるということだ。賛同あるいは共感する人が少なくても、どうしても進めるべきと判断できれば、自分を信じてその研究を進める以外にない。確立された分野で研究している若手研究者も、現在の盛況が単純な飽和ではなく、さらに大きな飛躍に繋がる夜明けでもあり得ることを心に銘じていただきたい。

令和2年度文部科学省予算案によると、若手研究者を中心とした研究者向けの「創発的研究」支援事業が新しくできるようだ(原稿執筆時の情報による)。7~10年間、毎年700万円の研究費で自分のやりたい挑戦的研究を進めることができる。化学系からも多くの若手研究者の申請があると期待される。自身の熱意や研究計画の重要性と独創性を示し、単なる独りよがりではないことを上手に説明し、研究費を獲得されることを期待したい。世は融合研究の掛け声が喧しいが、<sup>かまびす</sup>個々の深い専門があつての融合である。浮足立つことなく、自信をもって前進していただきたい。年會に話を戻すと、自分の発表の質疑応答や議論のみならず、いろいろな講演を聞いているうちに研究の新たな切り口やアイデアを思いつくことも多々あるので、存分に年会を利用されることを強くお勧めする。

© 2020 The Chemical Society of Japan